

海外の話題

「厚切トースト」

農林中央金庫 香港駐在員事務所長 落合 顕久

今、香港市民の間で“厚切トースト”（広東語で“厚多士”）が、本土からのマナーの悪い中国人観光客を揶揄する言葉として秘かに流行している。今年5月、香港の地下鉄内で飲食していた本土中国人の子供を、隣席の香港人が注意したところ、その母親が逆上して「称、好多事！（余計なお世話よ！）」と怒鳴り返してきたのを、他の乗客がスマホで録画し、ユーチューブに投稿。大陸訛りの「好多事」が香港人には“厚多士”に聞こえ、おまえは“厚切トースト”だ！と叫ぶ母親として話題になっているのである。

香港には、年間4千万人も本土中国人が入境している。その多くは日用品や高級ブランド品購入を目的とした短期滞在である。香港は経済的にかなりの恩恵を受けており、本来は歓迎すべき対象であるが、逆に数年前から「アンチ本土観光客」を叫ぶ街頭デモが実施される等、本土観光客と香港人の摩擦が表面化している。この背景には、本土観光客の公共の場でのマナー違反、高級店での傍若無人な振舞い、転売目的での生活日用品の買占め等がある。香港政府は事態を憂慮し、対策として「本土観光客数の2割削減」を軸に北京政府と調整しているようだ。一方で、人口7百万人の香港において、本土観光客4千万人の購買力が景気を支えているのは間違いなく、景気の状況次第で実施が先送りされるとの見方もある。

香港経済が本土観光客に依存するようになったのは、2003年、香港を襲ったSARS（重症急性呼吸器症候群）による経済停滞がきっかけである。同年7月北京政府は救済措置として本土から香港への個人旅行を解禁、香港のブランドショップの店員の挨拶が「イラッシャイマセ」から「ニイハオ」に変わるという現象を生んだ。これ以後、本土客の消費額は右肩上りで増加し、2004年から2013年の10年間で、270億香港ドル（約3,500億円）から1,700億香港ドル（約2兆2,100億円）まで拡大、香港の小売売上総額の3分の1を占めるに至った。

順調に拡大してきた本土観光客の消費も、昨年からの中国の経済成長鈍化と、習近平政権の反汚職キャンペーンの影響で減少しつつある。香港の2014年5月の小売売上高は前年比マイナス4.1%で、4ヶ月連続の前年割れ。特に宝飾品・時計など高級品が前年比マイナス24.5%と大きく落ち込んだ。経済界はこのような時期に本土観光客を制限することに反対しており、ある経済人は新聞インタビューで「香港人は自分達の生活が中国に依存していることを、もっと認識すべき」という趣旨の発言をしている。だが庶民の心情は“厚切トースト”に象徴される嫌悪感、さらには中国に対する政治的な反発も絡み合い、そう簡単に割り切れるものではなさそうだ。